



## 特集！湯築城跡出土の輸入陶磁器

湯築城跡からは発掘調査によって、これまでに1万点をこえる輸入陶磁器が見つっています。これらの輸入陶磁器は、戦国期の一つの城館遺跡から出土する量としては全国的に見ても大変多く、近年の研究では、湯築城が守護河野氏の居城であったという特性や、河野氏が大量に陶磁器を入手できた流通事情の一つとして瀬戸内海<sup>かいぞくしゅう</sup>の海賊衆との関わりなどが注目されています。

湯築城内で使用されていた輸入陶磁器の大半は中国産の陶磁器で、青磁・白磁・青花<sup>そめつけ</sup>（染付）の碗や皿などのほか、肩の張った褐釉壺<sup>かつゆうつぼ</sup>①・青磁洗<sup>せん</sup>②といった大型の深い容器などがあります。また、黄土をかけた焼締陶器の四耳壺<sup>しじこ</sup>③・黒釉壺④・対になった鉄絵壺<sup>てつえつぼ</sup>⑤はタイ産の陶磁器で、そのほか、朝鮮半島産の陶磁器も出土しています。

城内の生活を支えたこれら輸入陶磁器は、どのように使用されていたのでしょうか。



家臣団居住区 2 段階（16世紀前半～中頃）出土の陶磁器

## ●食器として使用された陶磁器●●●●●

中世の食器には、漆器（木製）とともに陶磁器があったことが絵巻物などで知られています。湯築城跡では木製品が残りにくい地下環境であったので、発掘調査によって漆器は発見されていませんが、輸入陶磁器の碗や皿が多量に出土しており、城内では、日常的におもな食器として使われていたと考えられます。



青花皿

食器として使用された輸入陶磁器の多くは中国産です。左写真の青花皿は、同じ形・大きさで、内側に玉取獅子、外側には唐草文様という同じ文様が描かれています。これらは、家臣団居住区（かしんだんきょじゅうく）の同じ建物跡からまとまって出土しました。このほか、五彩皿（ごさいざら）と呼ばれ赤・黄・緑色の上絵付けがされた皿をはじめ、青磁碗や青磁皿、白磁皿、青花碗や青花皿など、形・模様とも同じものが5枚～10枚で揃いの食器として使用されていた例がいくつも確認されています。

こうした食器のあり方からは、湯築城内において、武士たちが、銘々の膳（めいめいぜん）の前に食事をとった様子を想像することが出来ます。



五彩皿

## ●飾りとして使用された陶磁器●●●●●



青磁酒会壺



黒釉唐草文瓶



青花鉢



青磁盤



高麗青磁瓶子

湯築城跡からは、巻頭で紹介した青磁洗のほか青磁酒会壺（しゅかいこ）や、青磁盤（ぼん）、黒釉唐草文瓶（へい）、青花の大型の鉢などが出土しています。これらは中国からの舶来品で中世には「唐物」と呼ばれたものです。室町時代には、都の将軍が高級な輸入陶磁器（しよいん）を書院や棚の飾りとして使うようになり、地方の戦国大名をはじめ権力者も、これらの高級な陶磁器を求めるようになりました。

上級武士居住区（こうらい）から高麗青磁瓶子（へいし）の破片が出土しています（『湯築城だより』2号参照）。瓶子とは小さな口の付いた壺形の器のことで、この高麗青磁は朝鮮半島で13世紀前後につくられたと考えられますが、16世紀の湯築城内で使用されていました。当時でも特に稀少（きせう）な骨董品（こっとうひん）として扱われ、屋敷の座敷などに飾られていたと思われます。

このように、湯築城跡から出土した各種の高級な陶磁器は、河野氏がステイタスシンボルとして保有していたものと考えられ、当時伊予国の守護であった河野氏の富と権力を知る上で重要な考古資料です。

## ●茶道具・花入香炉●●●●●

中世には、連歌や茶の湯・花・香寄り合いなどの遊芸が盛んに行われるようになります。湯築城でも武士達がこれらの文化を受け入れたことが、茶・花・香に関連した道具の出土から分かります。

茶道具には、中国産の天目茶碗、朝鮮半島産の白磁碗や三島手の碗などのほか、備前焼の茶壺や建水、瀬戸美濃焼の天目茶碗が出土しています。このほか、中国産の白磁花入や青磁香炉、中国の南部で作られた華南三彩の水注（注ぎ口が付いた容器）が使われていました。



天目茶碗(中国産)



白磁碗(朝鮮半島産)



三島手の碗(朝鮮半島産)



青磁香炉



華南三彩水注

## ●湯築城にもちこまれた輸入陶磁器の背景●●●●●

湯築城跡から膨大な量の輸入陶磁器が出土することは、湯築城とその周辺が伊予国内でも最大の消費地であったことを示しています。また、数枚セットで揃えられた食器が多いことや、朝鮮半島産やタイ産の陶磁器、高麗青磁や華南三彩など国内でも出土の稀少な輸入陶磁器が存在するという事は、湯築城に持ち込まれた陶磁器の内容の豊富さを物語っています。さらに、ステータスシンボルとして保有された高級な輸入陶磁器は守護であった河野氏の権力を示すものと考えられます。そして、城内では、国際色豊かな輸入品に囲まれ、豊かな生活が繰り広げられていたことが想像できます。

河野氏がこれほど豊富な輸入陶磁器などの外来物資を入手できた背景には、河野氏と瀬戸内海の家賊衆との関係に注目する必要があります。戦国期には、芸予諸島の有力な海賊衆、三島（来島・能島・因島）村上氏が活躍しますが、そのうち来島村上氏は、河野氏の重臣となっています。山内譲氏の文献研究によると、来島村上氏が伊予との間に定期航路を持っていたことや、16世紀後半に湯築城の外港として「堀江津」が整備されたことなどが明らかにされています。

16世紀代の湯築城で使用された輸入陶磁器をはじめ多くの物資の入手は、海上交通や物資の流通を得意とした海賊衆、来島村上氏との関係によって成り立っていたと考えられます。



《参考文献》 山内譲『中世瀬戸内海地域史の研究』法政大学出版局 1998

## ●出土遺物 ミニギャラリー●●●●●●●●●●

### かわら 瓦

瓦は飛鳥時代から寺院建築を中心に使用されてきました。城の建築物に瓦が使用されるのは戦国時代からで、石垣や天守などの重層の礎石建物があり、その上に瓦が葺かれる城が築かれるようになるのは、織田信長が築いた安土城以降といわれます。安土城以前にも、寺院などで葺かれていた瓦を転用して城に瓦が葺かれた例は確認されていますが、安土城では瓦職人により初めて本格的に城郭専門の瓦が作られたといわれます。

湯築城は、堀や土塁をもつ戦国期の城です。近世の城にみられる石垣や天守は存在しませんが、発掘調査では、16世紀後半の最終遺構面から瓦が出土しました。湯築城では、全国的にみてもまだ城に瓦が葺かれることが少なかった時期に、瓦を使用した建築物が建てられていたといえます。

湯築城出土の瓦で注目されるのが、下の写真にある軒丸瓦と軒平瓦です。これらは軒先に置かれる瓦で、瓦当には文様があります。湯築城の大手付近で出土したこれらの瓦と同じ文様をもつ軒丸瓦・軒平瓦が、土佐（高知県）の長宗我部氏の本城である岡豊城と、同氏が一条氏から奪った中村城からも出土しています。

これらの瓦がどこで作られて城にどのように持ち込まれたのか、まだ明らかになっていませんが、長宗我部氏がかかえる瓦職人の製作した瓦ではないかとする見方があります。さらに、湯築城に長宗我部氏の城の瓦が持ち込まれたとみるならば、長宗我部元親の四国統一を示す資料といえるのではないかとみられています。けれども、文献史学では、戦国末期の河野氏の動静からすると長宗我部氏の四国統一は考えられないとする見方があり、河野氏と長宗我部氏との関係については、考古学の分野からも、今後様々な角度から検証していく必要があります。



上:軒丸瓦  
下:軒平瓦

湯築城跡出土の軒丸瓦・軒平瓦

## ●中世を知ろう!

### 石手寺

湯築城跡から東に約1kmのところに、四国八十八カ所霊場51番札所として有名な石手寺があります。寺伝によると、神亀5(728)年に聖武天皇の勅宣によって越智玉純が伽藍を創建し、元々は安養寺と呼ばれていましたが、弘法大師(空海)によって真言宗に改宗され、寺名も石手寺と改められたといわれます。

中世の境内は現在の数倍の広さがあり、湯築城東北の切抜門が石手寺の西門で、そこから東は石手寺の境内であったともいわれます。『予陽塵芥集』などによると、6院66坊の大伽藍であったとも伝えられますが、永禄9(1566)年に火災を受け堂宇の大半が消失しました。その火災後に描かれた『石手寺往古図』には、現在残っている二王門の外側に中門と総門があり、寺の周囲には院や坊も描かれるなど、往時の寺の繁栄をしのぶことが出来ます。

現在の石手寺に残る建築物の大半は、国宝、重要文化財となっています。二王門・本堂・三重塔・鐘楼は鎌倉時代、護摩堂は室町時代前期の建築といわれています。なかでも河野通継が文保2(1318)年に建立したと伝えられる二王門(国宝)は、重層楼門で、入母屋造りの本瓦葺きによる全国屈指の楼門と評価されています。また、門の左右室には、運慶一門の作と伝えられる金剛力士像が安置されています。

中世、石手寺は、湯築城城主であった河野氏と深く結びつきながら活動していたと考えられています。石手寺の本堂・三門(二王門・中門・総門)・東西門の再興は、文明13(1481)年、河野教通(通直)が大檀那となって行われたことが棟札に記されています。また、永禄5(1562)年には河野通宣(左京大夫)が温泉の制札を出し、石手寺僧侶の入浴日を規定しており、石手寺は、河野氏の保護を受け温泉経営にあっていたといわれています。



石手寺二王門(国宝)  
写真提供:愛媛県教育委員会



石手寺往古図(部分) 石手寺蔵

#### 参考文献

北川 淳一郎『熊野山石手寺』石手寺 1962

愛媛県史編さん委員会編『愛媛県史 芸術・文化財』1986

川岡 勉『〔増補〕河野氏の歴史と道後湯築城』青葉図書 1998

## 親子で学べる湯築城講座『つくってみよう!! 湯築城』

7月30日(土)、8月6日(土)の2日間、湯築城の立体模型を作る講座を開催し、小学5・6年生親子28組の参加がありました。

初日は、まず湯築城跡を見学して、湯築城は中央に高さ約30mの丘陵があり、その周りに二重の堀と土塁がめぐっていたことを確認し、その後、模型作りに取りかかりました。事前に自宅で切り抜いてきた山のパーツを重ねて土台とし、その上に粘土を貼って湯築城の丘陵部と城のくるわの部分成形し、城の周りには二重の土塁もめぐらしました。



2日目には、城のくるわや道を着色し、ペーパークラフトでミニチュアの武家屋敷やからめて門を作って配置し、最後に河野氏の家紋の入った旗を立てて完成させました。途中、細かな作業もあり、参加者は親子で協力しながら仲良く模型作りに取り組んでいました。「模型を作ってみて湯築城はこんな城だったとわかった」、「親子で協力して1つのものを作りながら楽しく学べた」との感想があり、大変好評でした。



今回の講座は、資料館裏にある樹齢400年の大クスノキの下で行いましたが、木陰は思ったよりも涼しく、参加者も自然の中でのびのびと模型作りにとりくんでいた様子が印象的でした。また、夏休み期間中、武家屋敷で湯築城模型作品展を開催したところ、多くの親子が見学に訪れました。

### 催し物ご案内 平成17年度湯築城資料館企画展 「河野通信一源平争乱を生きぬいた武者」

期 間 平成17年11月1日(火)～平成18年2月26日(日)  
会 場 道後公園湯築城資料館 武家屋敷2

### <<利用案内>>

- 公 園 常時開園(24時間OPEN) 入園料無料
- 展示施設 入館料無料 9時～17時  
休館日/毎週月曜日(休日の時は翌日)  
12月29日～1月3日



### 編集後記

湯築城資料館がオープンして4年目となりました。毎年開催している親子講座や企画展、湯築城だよりの発刊を楽しみにして下さる方々も増えてきました。皆様の声を励みにして、これからもがんばっていきたいと思います。(S)

### 湯築城だよりの 7号

編集・発行 湯築城資料館  
〒790-0857  
愛媛県松山市道後公園  
TEL 089-941-1480  
FAX 089-941-1481

[http://www11.ocn.ne.jp/~yuzuki-j/yuzuki\\_top.htm](http://www11.ocn.ne.jp/~yuzuki-j/yuzuki_top.htm)